があって「わしじゃ」おそろしく背の高い老人が長い杖をついて下りてくる。金剛院は実の名を両神山御嶽神社金剛院という。山伏の寺でこの老人はこゝの法印であった。「今ごろ何しに来なすった。」「薄氏のあとを訪ねて参上いたしました。」こゝで話がほぐれて,「わしのことを土地ではウスダイラと呼ぶ，ほんとうはスゝキダイラだと思う。山の桑畑をおこしていたら人骨と一しよに室町時代の永楽銭が沢山出てきた。もうその頃からこゝに住まっていたと思うが，下の村の冠婚葬祭はわしが行かねば始まらぬという。薄平はおそらく薬師堂のあたりであろう。」法印は今も正しく下の村の支配者であるらしい。わたしはこの異様な老人に丹党の薄氏のおもかげを見出した。阿蘇では古代の阿蘇の国の国造をまつる国造神社とこれに付随する古墳を訪ねた。社務所に立寄ると神官は阿蘇神社の方へ行って今はいないからとその母親だという老婆が懐中電燈を手に古墳の中を丁寧に案内してくれた。老婆の気圧されるような気品にこゝでも古代の豪族の姿をみた。出羽の羽黒山では坊の所有する経田という水田に中世の頃の荘園の形態がそのまゝのこっているのを知った。今にのこる姿をみるとそこに古代や中世がたぐり寄せられて歴史が現実となって眼前にせまってくる。何の因果かわたしは過去の時代に興味があって歴史地理などというものをやっているのだが古墳や館趾そのものにはあまり感動がない。それは殺して虫針でさした昆虫標本のようにひからびた姿だけである。古墳や館趾などの遺物は何かを調査するための手段であって対象ではない。生きた動物の生態には教えられることが多いと動物学者はいうが，歴史地理も過去の環境の復原だけでは昆虫標本のようでつやがない。地理の対象のすべての事象はやはり生きている。生きていることは時を追って形を変え，場所をうつし，動きまわることである。地理は横のひろがりだけを強調するけれどもすべての事象は生きているから過去もあり未来もある。わたしの地理はそうありたいと願っている。

偶　　感

矢　澤　大　二

随分以前のことである。私が初めてボン大学の，いまは亡きトロール先生を教室に訪ねたときのことであった。この付近で特に見て廻わりたい所は，との先生のお言葉に甘えて私は，一つはライン河谷の段丘地形，いま一つはラインラントの土地利用の変遷，の二つを申し上げた。先生は早速アイマンズさん（当時は助手。現在同大学経済地理学教授）を呼ばれ，明朝、大学の車を使って，ラインの段丘を見てあるくようにと云われた。そこでわれわれ二人は，その翌日，ほとんど一日がかりで，ライン川沿いを巡検した。途々，同氏から，この地域の地形発達のあとを，現地について，実に明快に説明していただいた。

その数日後，これまたトロール先生のお計らいで，フレンツェルさん（当時は助手。現在は地形学，古地理学における第一人者）を煩わして，これまた大学の車で，ラインラントの現在の土地利用はもとより，現在に至るまでのその変遷の大筋を理解すべく，再び一日がかりで見て廻わった。途々同氏から実に適切な説明のあったことは勿論である。

ライン河谷の段丘，ラインラントの土地利用の変遷などについては，文献を通して，私も多少の知

識はすでにもっていた。しかしこの二度の巡検によって，さらに明確に，かつ深く理解できたことはまことに幸いであった。がそれにも増して感銘を深めたのは，この二人の少壮（当時）地理学者のもつ識見の高さ，幅の広さであった。お二人とも，狭義の専門からは外れていると云って云えなくもない分野について，格別の用意もなしに，現地において明快な説明をなし得る，その蓄積には敬服したものである。

しかしこの二例は決して例外ではなく，寧ろ極めてあたりまえであることは，いろいろな場合に訪れた大学の人達と話し合い，あるいは歩いているあいだに解った。老大家はもとより，少壮の地理学者もまた，いわゆる専門分野については云うに及ばず，地理学の諸分野について，幅広い，しかもときには高い識見をもっている事実を私はしばしば知ることができた。それであればこそ，たとえ教授陣は少数でも，さまざまな分野を志す多数の学生を指導できる条件がとも角具備されているわけであろう。特定の分野に深く没入し勝ちなわが国の地理学者の場合とは，どうも対照的なように思われる。このことは，ただに，大学教授の任用の制度，その仕方などのちがいに係わるものなのであろうか。

わが国を訪れる海外の仲間の数は毎年相当なものである。個人できたり，グループできたりなど。その人達から，ややまとまった話，あるいは現地での説明などをときどき求められる。私自身のいわゆる専門分野が何であるのかなどは先刻承知の上で，なおかつ彼等が話を，説明を求める対象は，例えば東京の発達についてであったり，一緒に歩いた地域の地形についてであったり，実にさまざまである。私が日本の地理学徒の一人であるからには，そのような課題についても当然一応の話はできる筈と彼等が考えているのではないか，そんなふうに私には思えてならない。

ねこの噺

大貫　俊

犬や猫をペットとして飼っている人は珍らしくないが，それを数匹飼う人となるとかなり限られてくると思う。私は決して自慢する積りはないが，わが家に現在猫が数匹いる。ところで動物を群れ飼いしていると，1匹の場合にはわからない習性が色々わかってきて，その限りでは面白い。俗にいわれていることが正しかったり，間違っていたり，場合によってはあてはまるということもわかってくる。以下思いつくままに猫の常識を検討してみよう。

犬は飼主にこびるけれど猫は反対である。だから犬の好きな人はワンマンで，猫の好きな人は民主的だという説がある。これはある程度当っているが，どうも野性の残留度と関係があるらしい。猫のなかにも娼婦的な猫がいることを申し上げたい。

猫は祟るとか化けるとか，知的レベルの低い伝説がある。残念ながら本当だという実例は体験していない。しかし前頭葉がないにしては，頭のいゝ猫とわるい猫の差は大きい。ある人の説によると，人間の顔（本当は目）をじっと見つめる猫は「精の入った猫」といって祟る可能性があるから大事にした方がいゝという。空腹な時でなくとも，何気なく視線を感じさせる猫はあまり気味のいゝものではないのは事実だ。何を考えているのかわからないから。